

朝夷巡島記第八編五

| | |
|-----|----|
| 庫書館 | 5 |
| 62 | 40 |
| 2 | 95 |
| 10 | |
| 40 | |

| |
|------|
| 13 |
| 3093 |
| 40 |



八編

昭和九年七月二十三日 購求

朝夷巡島記全傳第八編卷之五



東都

松亭金水編次

續輯第十九

身と捐て節と主んとい佳人の情
残毒忽地報ふ家族が最期

秋の九月下流夕の風の身ぞ染む。川を小生一芦茅の枯も場さるるさあだ。
菜と一尾花霏ことまき雪うと還る。篋媛ハ穉児の翠麻呂とわたり抱さる。
淵へ身と没せんと岸ふらりよりそ処此処と呻吟や傍とらん石にて刻める。
地流る哉年経るう苔生て墓生後光ハ胸損しるが。何者う著せまらじ
けん。菅の小笠も今もあ。雨も腐ちり破羅とふ。骨の速るハ木枯れも吹
荒さる一蜘蛛の巣も冬の山田小獨ら。破ま一案山子小彷彿と。娘の作きて
額著の六道能化と笑えら。地菘芥の尊さ。川をの凡も吹曝と。雨の

水橋

降る日雪の夜も身軀彰りとちりぬ衆生済度のなる世の夢の
仮の宿今宵不迫る親と子後の世助け入り傳へて推さりの罪業
浅き故とりて親と俱わいのわらず賽のいふ集まりん井の教化を受
とてこゝろ減のころんば擗さりの後世とて偏不憑こまふはと操かへる
畏病の負ん小初夜も近づきこり尙童次等が注方と探しあへる會べ死
後志と得逐ぬのころ息ある中の恥辱へ慈愛悔し世に在る程の心
ありりり今更何といはん一刻も為湛ばまと思ひありと弱る心と自
勵ま岸不生る柳蔭小暗さ方ふらうりて南無阿弥陀佛陀仏と唱ふ
あはれ身と流らし高氷水へ逆しまふ飛入んまは裾曳捉まは後
君と声うけらまは是ぞこ宮小四郎が追手と心周章て振ふは再び
入ん踏出は斤足その間不緊と抱き留り媛は在りぬ思ひ

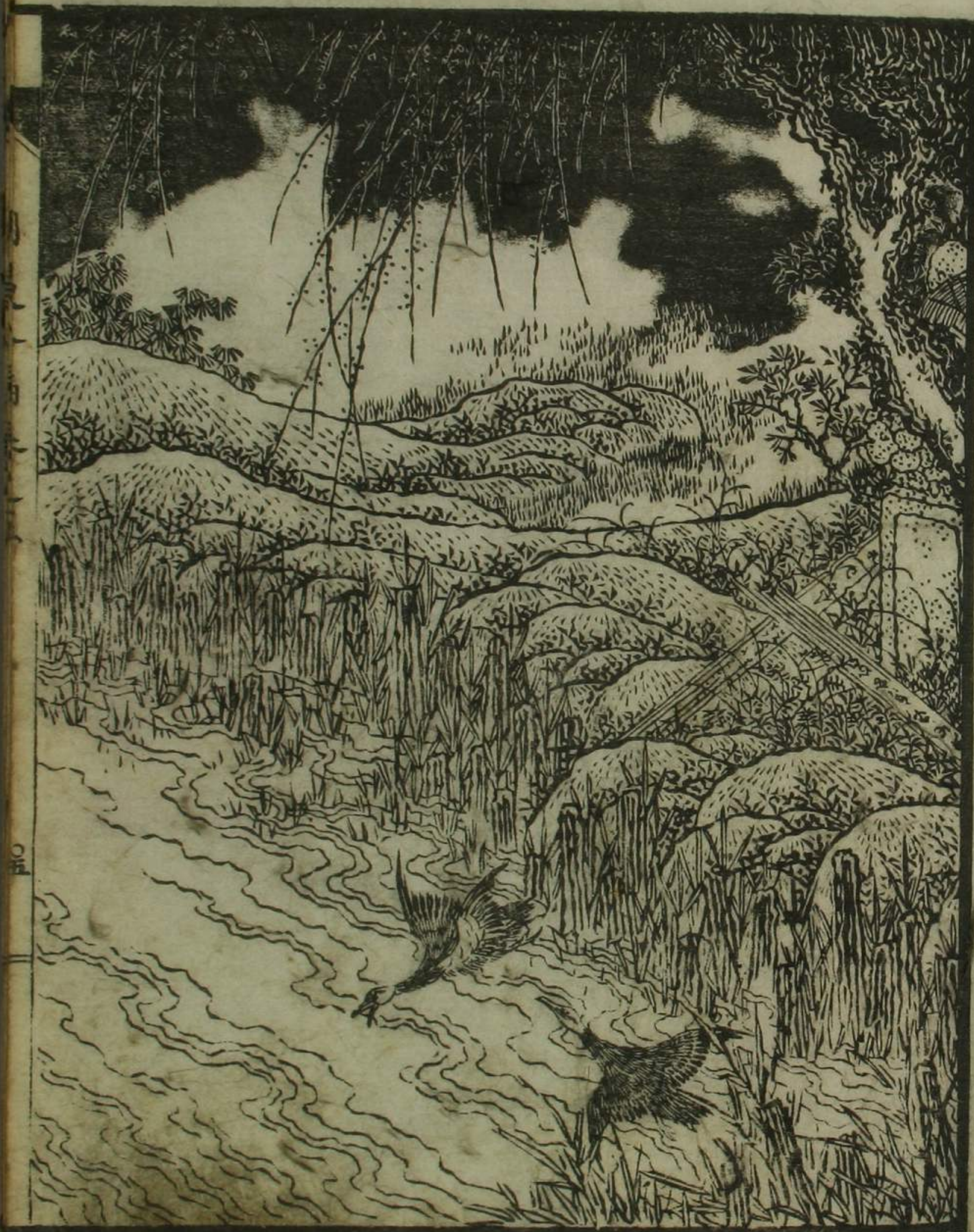
何者あまば妨るす。す処離さずやと抱苗さる。手と拂んて力と究
むろりの女の纖弱さ何卒離くこと喃と叫ぶ声は胸震へ人の心
地のあざむるべ。當下件の抱苗さる。雄子のやと声とあけ駭さるる媛
君と在下とそへ三草太郎五昌之をいふと言まをさと屢るまは開先
緩言いあげん奈何あるまは所へ身と沈めんて死に且み易け
まど早くと後の悔ららんやとつらま駭く筐媛さるもそ方へ太郎五
思ひのひまは此処へ来ん吾併と苗も不側ま決りての遠早く襟余ま
心肉をかくと問まは此方の意得ば何等の條う夢もぞ存せしむのいひ
まづく此方と向んと手と放し傍不蹲路に拵在下の所へ参りて
仔細の陸奥磐城不爭論あり。その検断のあると。朝夷三郎義秀ぬ
鎌倉と発足あり。既小まの傍と返らま。奮友の情志とかく。石戸太田の

両荘と訪ま欲しと思せども。這回ハ君の命おより。下まらるるも。私お他
 と訊へ。時多。因て城戸武詮と太田の荘へ遣ま。光仲ハ安否と
 訪ま。在下と。吉見ハ。起居と尋問せよとある。作おより。兩人ハ昨日途
 を。別。既。地へ入。案内ハ。武藏野の尾花原。路
 ふ。差。方。呻吟。漸。秋。日。蔭。全
 く暮。東。西。の。分。ち。の。荒。屋。の。拵。火。の。影。と。目。的。の。石。戸。の。荘。入。
 川。副。と。刺。所。不。釋。見。懷。さ。女。あり。定。め。當。所。の。人。ら。ん。彼
 不。問。ん。と。近。づ。ま。言。葉。と。か。ん。ら。ん。南。无。阿。弥。陀。佛。と。唱。る。言。音。言。う。
 媛。の。声。不。く。も。似。り。と。存。ま。ま。ど。か。ん。ら。ん。思。ひ。の。う。ず。ま。の。怪。し。風。情
 向。で。も。ち。た。る。川。へ。身。と。沉。め。ん。と。呻。吟。何。方。の。誰。と。い。わ。ね。ど。も。ま。ら。ん。
 若。き。女。子。の。身。殊。不。抱。き。釋。見。と。兩。個。が。命。捨。お。ま。さ。條。と。あ。ら。む。お。れ。

女子ハ心隘くと。妻夫喧嘩いさうの。み。不。逼。り。と。身。と。逼。つ。の。世。間。不。裁。許。の。あ。ら。
 若。然。ら。ん。の。不。便。の。み。と。い。わ。入。る。老。波。女。心。ま。う。且。の。苗。め。ん。遣。ん。と。
 抱。き。苗。の。媛。君。と。思。ひ。の。う。ず。め。釋。の。釈。思。時。の。身。の。つ。ま。く。解。さ。び。死。ん。と。
 覚。悟。あ。ら。ま。一。朝。の。と。あ。ら。ん。の。條。奈。何。媛。君。よ。頼。り。作。せ。し。と。詞。遠。
 去。回。け。ら。ま。媛。の。悲。し。と。面。目。あ。ら。ま。始。め。う。り。と。滝。と。ら。る。數。行。の。涙。い。と。
 女。の。時。や。と。顔。と。拳。げ。眼。と。屢。と。ま。ま。の。程。の。容。子。逸。と。物。が。り。任。意。
 良。人。不。捨。ら。ま。の。身。と。撒。し。の。我。の。先。立。の。父。の。靈。の。恥。と。お。り。の。生。か。
 身。と。不。捐。名。と。潔。と。う。せ。ん。乃。の。猶。主。従。の。縁。さ。ん。ん。今。盤。不。
 逢。て。の。言。遺。す。歡。さ。さ。若。も。の。後。行。者。刀。称。不。廻。り。あ。日。の。あ。ら。
 ら。妻。若。く。是。と。告。て。給。べ。り。へ。と。ま。の。と。の。朝。夷。の。年。未。日。の。あ。ら。
 恩。義。と。直。示。あ。ら。身。の。薄。命。お。報。う。へ。と。時。節。の。仇。不。散。る。深。山。の。松。若。れ

あつて錦と飾る秋ぞふさ哀まらる身のあ果と想像やとらり小懐小
在る輝児の顔不顔とあやそ歎き小沈む理と実なりと想ひあけり
ゆも中こああぬめりゆくはま小争う媛と死すさがる界小定會皇天と
扶けよと宣ふあつんと恥と改めそのは歎き且いませぬ必と損て潔と名と遺
さんと思すて逸くその理顯然あて源廷尉の媛君と誰かるとて称せり
は小在下因らす比もさあて見えなすこは命と助るのころ離れ報時
あつん冠者の心奈何とも知てけとせし修小隠まあ小由郎さ深き
こと推量り并と避んとのあやあえまは媛君と若君のは命馬不迫り
無體のふり起るささる渠も在下身不把ての主の仇生むべき殺者
あつん今宵かの家へ潜込で慶あつるままこの昌之の腹の医む媛君案内
あつれれ形のこと例のま血乳小早鳥済と呵すあつん然不あつん先頃

冠者が入部の折宮小由郎弘義の謙余未と潜居り執権衙
屢屢入りとらふあり當下朝夷義秀大人ことと牙石戸の莊の當時義
の異つ所然不吉見義邦が新小の主とありさる假令さる要小用あ
とも入部のこと計らふべき自然のあつて密やう小馬小あつて不審あれ思
さく先達石戸の莊と領さんと屢執権賄賂とのその條ありてせり
こまの這回義邦賜ひしと遺憾あつて怨切あつて高あつてあつん波執
権が好悪る始終さるさるあり義邦元未暇湯を思ひしとらる陷
陥るさるのありやせん汝石戸不許さる密不ことと冠者刀称小告よと作せ
らひゆ今こそ思ひ當りさる何と不のあつて故主の歸死を心あつてのさ
来未未媛君案内と頻り小役すその面と媛小人やり七然のあつん然こ
あつて思へども信偽と定らふせば妾が今宵の一件は実不重次不起り



草夷ノ統卷之五

浮世を
 倦去て
 篋媛入水
 せんとい

渠が母ある芥木ふいの程よけて種々の恵と稟りともあり。その報いさ不得せ
 びて一家を殲し殺さん罪いと深き所あり。その人董次秋弘も。年小
 及ぶの悪行あり。吾侪も迫り及ぶ威は憎し。然るも。実小殺す心小
 あらねば。その罪は猶軽し。吾侪が小命を殞す。身小忍びざる。扱のめん
 任意のまじ死し。渠と敵といへば。吾侪が方何と思ふ。とて。太即五
 昌之の眼を怒ら。牙を唾。申斐る。と宣ふ。のろみ芥木とや。日未
 の悪心。媛君とて折す。家の新婦ある。とて。誠の心た。とて。如
 董次が罪。八万死小當まり。争う敵といへば。恐る。とて。おれと。媛が宜ふ。とて
 理小似て。理あり。とて。婦人の仁。とて。曾多き。とて。猛夫。とて。折す。とて。ひ
 後小方。義小あらず。冠者刀。称。とて。朝夷の大人。小。とて。怒り。とて。當下
 件の分解。とて。不義と定。とて。腹。とて。壁。とて。涙。とて。胸。とて。遺。とて。方。とて。

左右を。同小夜や更る。い。と。立。と。折。と。傍。の。教。蔭。と。頭。れ。出。る
 七八人。手。小。棒。と。麻。繩。と。三。三。條。持。り。あり。女子の足。と。早。と。遠。く。の。休。と
 脊戸廻り。林竹。教。稻。塚。を。推。頭。探。し。時刻。伸。び。所。詮。今。宵。の。画。餅。方。
 と。思。ひ。あり。若。大。爺。黄金。の。十。箱。も。墮。と。小。眼。逆。と。自。幸。も。ある。吾。侪。
 先。小。立。の。大。駭。動。悔。と。お。り。と。捨。て。と。あ。る。と。は。は。と。遠。出。と
 隊。旗。を。隠。し。川。の。柳。影。定。り。小。を。道。す。と。媛。が。後。と。推。し。雜。
 媛。の。嗟。と。身。を。遠。巡。農。民。の。族。と。物。も。い。と。近。と。所。小。三。草。太。郎。五。
 ち。ち。塞。り。尾。終。り。あ。る。農。民。們。你。が。乃。主。君。小。も。弁。と。地。の。内。室。と
 近。へ。ん。と。あ。る。と。程。の。式。あ。る。と。然。り。あ。る。と。燈。火。も。あ。る。と。棒。と。繩。と。誰。人。指。
 揮。せ。頓。退。と。ず。の。速。と。小。首。捻。切。と。並。と。勇。者。の。羽。小。雜。人。の。何。と。回。答。も
 あ。る。と。の。主。小。辨。と。吾。侪。の。倅。親。と。小。辨。と。見。と。懷。と。若。と。女。と。此。

吟呻あつて引傳し疾く連れて来上り勞資の何ぞりての共へる邑の歩吏
 が觸ふより。這へ邂逅の錢設けはね損と申して催し集り燈火のあひ
 却て此方の目標ありて便りくんと態と炬火を携へて這へ吾門が
 巧夫のこ此他何の思案もあぬ下郎が罪の赦さま上り最初地内室
 と知るもの争ふ勞資不心と掛ん這へ怪しくばと替らま太郎五昌之推
 かく。おての你等その罪あり歩吏を以て觸させ何方の誰ぞ疾よりと
 詰り問きてをそここの宮刀称の若大爺董次刀称せしむとて点取答
 あつて我内室の供へ董次が方小判を。頓先達て案内とせよ。このを
 各立あがり開いと易き事とを是より路遠くば此方へ来ませし先
 小立細及侍ひ歩行おぞ三草へ媛を扶け曳し住と数町あつて早
 秋弘が耳おぼえを。色媛隠し川を小呻吟と。自らの伴はんと奴僕を

一個兩個とめて炬火を照さし徑路を喘を走来媛をよす中より董次
 秋弘と入る太郎五昌之波より速く董次が前へ塞り汝の宮董次を
 我の往昔昔見行着義邦の臣あり今朝夷義秀小附屬し三草
 太郎五昌之あり。這へるもの詮あり今も汝色媛無難の事難
 頼をり小より進退谷より。媛の家と申し必命と捨んとし。所へ
 折よくありて扶けり。媛の心成不恙ありと。初まて媛と苦しはあむら
 脱小汝が所業小申り。我故主のこあり。その怨とて復さんと汝が家小
 仕んとすると汝早くもこ小来て。必會するの物怪の儼侍乞我。腐負
 せよ。このひも果ぬ小腰刀す。こて技とて向へ董次秋弘必ひのよりん。
 情とてさるる今とて。道は隠しんや。あは心裡の十千分の怖まれば
 詮方あり。胸の定めを答るる。冠者小捨らま便溺るは身と疾くの不

便さふ。若う心小應下る。この後見と守りまて石戸の莊小安堵す。性
未まを計らんと。好意と以て落らひしを雅頼ありとの謂とあり。性
兼しよの條ある。夫をあると家と拔死るとする。媛が血迷ふ。不
老て我の一向共々をあると汝斥言と解耳。小安堵と。故主の死小怨ん
ふ。狂人。狼藉。媛が疾まりの私夫小や意得。おろ。とせせも敢
を昌之が身と遁まんとて左右とひとも誰の誠とせん。汝が今より如く。何と
悔しと媛の背が此と捨ふ。出あへんや。畢竟已が非と仰り。他と思ふす。を
一言詞戦ひ。益あり。秘技放を。紐釵汝と戮。我死す。兩箇のを
究めま。元の鞘へ収ま。然し。口の根横裂。小裂。と。雷光の是く
と。又と騎。一馬りて打込。今。猶。縁あり。と。董次。刀。合。せ。護
矢。と。要。め。が。右。小。左。外。虎。乱。青。眼。上。段。下。段。挑。と。狐。景。察。と

雑人。劣。ひ。膽。の。心。消。る。と。り。小。忍。ま。燃。あ。う。う。う。炬。火。小。執。火。さ。首。を
て。抛。り。出。し。と。枯。麻。と。逃。散。ま。今。ま。明。と。火。影。と。暴。小。曇。雲。の。暗
又の光りと目的を東風西風太郎五が尖き太刀と受損。董次の肩先
五六寸切込。と。腕。弛。と。嗟。と。叫。び。と。撞。と。伏。と。導。小。昌。之。足。踏。れ
と。微。塵。ある。と。と。ち。返。む。刀。小。朋。中。と。と。り。と。切。放。と。と。を。も。え。て。秋
弘。と。あ。ま。平。張。死。で。り。か。折。と。雑。人。が。孩。と。飯。り。箇。様。と。の。知。ら。せ。お
人。と。ち。驚。く。折。し。修。験。酷。残。か。と。の。を。昨。日。の。謝。後。且。と。の。尾
と。索。ね。ん。と。ま。り。と。の。閑。室。小。酒。宴。と。ま。の。あ。と。と。合。せ。と。酒。散
ふ。と。と。碎。と。催。と。と。暮。あ。と。び。筐。媛。竹。方
の男女とち噪。中。小。董。次。秋。弘。雑。人。們。と。呼。び。集。め。左。せ。右。せ。と
指揮。と。行。方。と。探。し。索。む。と。眉。毛。の。火。と。拂。ふ。と。ぬ。く。と。喧。す。と。く

度る程。この怪々々々然のあり。その内の向小住方の知まん。と猶縁を
 なるの注進。開の何奴ぞ一大子と。小四郎弘義とらあり。刀あつたり。並
 ぬんとす。とき。芥木の要めと狂め。雑人們も周章惑ひて。そのい所定
 あねど。媛が由縁の人々。然も拒む中。おさんえ。るた奴あ。じ。さ。と。卒
 示小する。あ。不憶。返あ。人。数多。お。往。人。を。甲。未。上。未。上。小
 四郎。刀。称。心。を。猛。く。在。世。老。年。あり。你。達。傍。小。屠。副。に。過。る。た。針
 ら。よ。と。狂。氣。の。如。く。立。ま。る。と。と。人。の。け。酷。残。も。己。弓。矢。と。執。る。此。あ
 ねど。義。と。を。為。さ。る。勇。り。俱。小。姓。と。締。在。に。帯。小。狭。め。二。刀。の。を。貸
 め。と。傍。る。刀。一。腰。借。う。け。て。人。ま。長。押。お。け。る。薙。刀。と。屈。竟。の。の。を
 あ。ま。と。外。と。と。と。引。扱。は。是。が。あ。ま。小。僻。者。の。首。薙。落。た。る。白。田。の。崑
 崙。瓜。と。伐。り。易。し。と。誇。り。う。小。勇。と。立。る。義。勢。小。曳。と。農。民。們。の。嘯。日。と。

の。一。ら。引。副。り。弘。義。の。董。次。が。牙。の。う。人。氣。遣。し。小。胸。の。と。の。踏。り
 と。も。足。の。猶。ひ。と。所。と。踏。ど。息。切。と。心。昏。迷。故。も。ぬ。ま。小。弱。り。う。
 氣。と。励。ま。す。十。町。不。勝。の。隱。と。川。も。不。近。づ。け。と。如。法。暗。夜。の。何。方。ぞ。と。人。あ。る
 方。も。人。と。ス。う。む。要。時。汚。湛。その。う。ふ。う。ち。合。ふ。又。の。音。吹。え。嗟。と。叫。び。て
 倒。る。つ。ま。り。う。兒。の。声。と。弘。義。の。あ。る。も。あ。る。と。炬。火。と。自。身。持。人。弛。せ。る
 こと。ふ。を。慙。あ。る。も。秋。弘。の。肩。先。册。中。所。放。と。と。般。小。漆。る。景。勢。小。右。又
 どの。向。ひ。小。漸。ま。る。壯。士。へ。己。が。子。の。敵。を。処。動。く。と。詰。修。て。宮。小。四。郎。弘。義
 ぞ。恨。の。及。く。請。よ。と。ひ。ひ。引。扱。く。氷。の。及。意。ひ。り。と。三。草。昌。之。血。の。振。て
 さら。し。う。年。と。その。老。と。弘。義。の。腕。小。骨。人。え。の。あ。る。の。あ。ま。り。得。昌。之。猛。と。も
 左。右。あ。く。下。風。小。立。は。後。小。引。副。小。修。道。院。僅。小。敵。の。二。個。の。青。春。何。条。と。あ。る
 べ。と。者。共。砂。と。搥。相。眼。潰。し。ふ。ら。ち。挂。上。と。指。揮。す。と。薙。刀。の。鞘。と。外。と。あ。

獄之淀の川流の水車鳴戸の潮八丈ありとある黒汝の渦巻を搏と
 廻るをかくと昌之の信と白眼汝の誰を宮が无道と佐ける狡者世ふ二と
 あり法師首とま不把きて後悔するに飛鳥の翔り陽炎稲妻を祭頭
 へは彼処不隠と争ふとや半晌可當下宮弘義の渾血不数箇所の瘡を
 負て心神疲れ挫と坐し刀と杖不息次居る酷残の程後まゆらに薙
 刀左右不晃り。躍りかゝる昌之の二上二下不請流し刀逆手不薙刀の灣
 形發矢とうち返せ。酷残堪へば薙刀と反落さまて心悸を拾ひ
 きて俯く筋と昌之透さず手とて伸べ右の腕と丁と研る切らまて
 酷残猶肺もず拾ふ長刀晃り足と攔を赤騰り。上う撲り死と平め
 諸も不空と拂はせを思へば及る肌腹と兩段ふるまて切落む太刀不
 得最初の右手の疵疼むのころ滴る血も不不粘りて肘の自在とぬす

請損とて肚と切放とまて倒す御舎送る血の巖角不せまて落る滝の
 大腸小腸痲口より流き出つ作及て物とゆいて死ぐるなり。夫酷
 残が死不ある。自業自得とらひのべ。彼小角が流まて汲と有髪を
 不僧行と保つて以て優波女塞とらひ孔雀明王の經と誦し。國家の
 不太平と祈念するべし職不在り。かの雲不糸り空と翔る外法の法とぬ
 宮弘義が賄賂の黄金不惑ひて邪た不共し。幻術とりて人眼瞋
 天の邪惡を罰まその勝の人を猶然り。是等と以て闕する人の勸懲とらぬ
 りのあり。于茲芥木の弘義せん。いふさうありその子ある。董次も敢て音
 信ありま今ハハしく按ト苦し。門を不出つ右祝左祝まど一向容子の
 一人遺りて千万の物思ひとてあらんより。その場ふゆと音信と

女如トと沉吟あり。厨漏不居る炊女と一人遺る小奴とと。但トと一と路
 去。畦路竹ひと散不逢の火氣と目的ト。走りてす処へ近づけり。嗟
 慙や弘義の刀と杖不備。息の有なき分とぬ小董次の何ゆらと
 けん。般不深倒と。ま。修道院殊残も。作反死してありらるぞ。這へ
 如何不とるり。弘義が傍不修。聊息ある容子耳の毛を
 口と傍せ。芥木不ゆり小四郎刀称心定り。女でともあま良人子と殺
 當の故。篋媛も諸共討て怨と報うべ。然とて彼奴等何
 隱と又心びらん。出ゆくと大声不呼る声と。つつけ。三草曰之。忽然と
 出て汝と。弘義が渾家芥木よ。う。你達一面の交りあけ。思
 恨とあねど故主冠者刀称夫婦と種々。陥と。と。捨。あ。業
 その人の不恨と。復す。是も。腹の医ぬ死骸の汝不呉。

追善供養の勝手不あせ。と。谷木の小四郎が突る刀と扱。り。こ
 汝が為不良人弘義子の秋弘まを殺。追善供養の汝のぞと
 篋媛との首刎て供。他のあ。覚悟あせよと怒りの面色血刀
 振て。対。三草の呵。ち。笑ひ罪ありて。父子の奴等。殊せ。と。を
 仇と報んと。僻。あり。汝女不あ。俱。三途の及連と。做。易
 此。善益の殺生刀の標。と。助。命と捐。来。火氣と慕。夏
 の虫。思。所。為。せん。疾。得。亡。者。の。後。世。法。陀。觀。音。と。憑。む。指
 ぞと。朝。ら。ま。を。行。急。ら。芥。木。の。さ。小。面。答。あ。く。纖。弱。女。子。の。疑。る。念
 乱。ま。髪。の。逆。ま。て。裾。入。返。ま。夜。半。の。風。炬。火。の。光。り。絶。る。小。暗。光
 方。不。立。り。媛。と。る。より。の。輝。の。起。り。の。媛。ぞ。ま。渠。と。ひ。さ。な。物。と。並
 芥。木。と。昌。之。把。て。引。居。と。溜。り。扱。ら。ち。揮。る。双。ら。ち。穰。と。ん。と。

卻合肩先破羅離と切裂衣と嗟と叫びて倒る。芥木三草のつらりて足
を扶けて遣んとあひり。その血の罪のその血と責双ふかろぞ不便なる
まの安救の苦ことせんより一撃ふと刀振あげまかると媛の要めとあ
狂め。瘡負の傍へ近よると。苦と息と不と吻て。瘡負の首とうち搦げ。
物のひらけある景勢なり

續輯第二十
初て非と悟る懺悔物語
奸計再三到る程谷の驛

當下媛の芥木が傍ふ。到りてやと声とあげ。瘡負よ心と定ふ持ふ一
言のいとあり。吾們あの因縁たて何もの地ふ安堵せぬ。這般の究めて安
んと思ふ回もろく。冠者刀拵が身と隠さるとふより。程谷許の物も心
死ぬべく歎くより。董次が怒を聞く耳と右流左けと。辱しめる後の崇

の護影ふ然もろく會釈との座と。あつちの思ふ所詮は世の
憑とふる死の死す不倍と。胸と定め黄昏ふ迷ひ出ツ呻吟て。既
不死るとする時と。ある太郎五昌之小端ろく逢て互の作天と云と縁
故と。語と渠の怒す不憚ら。あん身が親子と怨まんと早う理さるる。
らん来りし始めより。心裡のいざ知らず。あん身が鳥とみ抱ふ。孩児との安と
落しるその恵と。今と忘るるさす。この身不恙あると。死心と復さず
このまふ。この地と退てま。後ふ。差方あくと。雷の。潮ふ。この血を探
雑人等手籠ふせんとする故。昌之怒りて渠を懲り。あん身が家ふの
向いんと。新へ近来る董次折と。善けと。つらり合刺。面を流より
来。弘義及人の修験と。も敢て死。心と地と。もい。え。罪業を
倍。半の悔と。折ふ。あん身が来。手。渠の。助けよ。と。口と

して在りて追ぬる今こそ跡返らぬの深痺然も多たてふ一家に
 殺す非道と恨もせん。恨忍せよとのんさへの涙不噀る喘涸る斧木
 掉あげておよ七生と活るりの。度と惜はるりのやある。況く一家に
 ろのむけを恨みぬ。九世の換るとも仇とらるるさ苦あまも畢竟
 子利不惑ひ義と忘るる天罰といふ今盤不思ひ當りたり。常言ふも
 り如く人と咒咀バ穴ニと。喻へ不洩を吾們が。巧この柄の詛語及び
 めるこの災難争う人とむむむと。喃媛う人よ安ん石戸の柱の縛より良
 人望とと慈なる土地然ると這回吉見刀称不賜りたりと安んり。連
 まさ如何あるは計らひと夜と日不嗣て北條刀称の。は彼へ替てその
 怨とらるる小莊園の執権とふも言不任せ。這回吉見不賜のほど彼人の
 故範頼の嫡子とては連枝あり。後と害ふる條ある。汝若肉の伎術と

りて。彼人とも失るり。石戸の柱と賜はんと仔細ありと密に宣ふふ
 弘義の一日も早く計らんと思へど更小便溺あり。竹塚ある修道院の昔よりて
 怨あり。渠不後らひ咒咀せんと救多の黄金と賄賂て憑め。異儀あり。流ひ
 冠者に住める床下へ秘符を埋め。彌伏と。做さんとするふ。流ひ人々
 因て熊虎の魔神を驅り。隠し川を失るんと。初甲斐々當下より冠者
 のその身を隠さる。然も。程男子あり。是も俱に計らんとする物あり。子の秋
 媛が。媛不慕慕の情態深く。尚孩兒まで失るり。媛の歎と不身とを捨ぬ。
 媛が。媛不慕慕の情態深く。尚孩兒まで失るり。媛の歎と不身とを捨ぬ。
 らひて董次不媛と挑ませ。のの渠を頼ひて協へ。二の件の莊園と奪はんとす。
 計略の差ひて。景勢の他より来る。災害あり。自業自得の。今盤の善
 艱あはまこ。人と遊る。血を不と俱不吻く息も。汝才不弱。断未廢媛の



秋ひろ

くさ

ひろば

さの木



三草

月夜八編

〇十四

芥木死期不
懐梅のそと
語

件の物よりて、さび毎小胸潰是或ひの孩を怖し。と心神寒る心地へ
 憎さの憎し然あ。四重五逆の罪科の懺悔あり。消るる消るる消るる
 木もかゝる故と。不問語の身の悪み。の後一向恨ま。し。今証ふ
 ろんと思ふいと不便さ。掌と合し。伏拜し。西方浄土の阿彌陀佛
 世に非業とも引接ありて救ふ。願以此功德普及於一切。自他平
 等と念むる。涙あ。の回向文三草太郎五昌之也。俱小。ち。より此の
 罪を倍礼して死ぬ。の潔し。人の死に。そのい。と。の聖の格。宣
 ろる。と血刀拭ひ。靴不收め。今。女子。物語。北條。刀。称。が。移。ま。を。小。悟。る
 所。以。分。こ。じ。冠。者。あ。疾。より。その。と。素。一。ひ。て。の。序。和。成。と。際。の。ひ
 ろん。右。も。左。も。ら。の。地。不。在。さ。後。の。災害。を。べ。む。ひ。在。下。既。小。富。不。と。汚
 朝夷大人と。逐。ひ。て。磐城へ。来る。苦。あ。る。危。急。の。場。小。勝。と。ま。る。媛。居

の心安居と。う。本。と。彼。受。性。と。ん。や。城。戸。四。郎。武。詮。の。使。と。太。田。へ。あり。ぬ。
 さ。ま。の。今。より。の。供。あ。太。田。へ。性。に。光。仲。の。在。さ。俱。小。高。級。の。後。の。計。ら
 ん。心。奈。何。と。信。媛。問。ま。て。ま。不。仔細。の。あ。じ。馬。飼。標。吉。が。朝。夷。大人。小
 告。ん。と。の。地。と。死。行。う。か。の。大人。の。や。陸。奥。へ。首。途。の。跡。な。ま。と。失。る。ひ。帰。り
 来。ん。憶。ひ。も。ひ。ぬ。る。大。多。吾。侪。の。往。方。を。さ。ま。の。途。方。小。迷。り。の。と。の。奈。何
 不。せ。ま。し。の。後。さ。昌。之。右。左。の。思。案。も。著。以。手。と。杖。と。を。折。る。喘。を。来。る
 の。誰。う。と。さ。の。嗣。忠。あり。最。ふ。兩。個。が。傍。小。蹲。踞。し。昨夜。漸。く。交。の。刻
 頃。後。今。之。到。ま。著。ま。和。田。殿。へ。ま。り。朝。夷。大人。の。如。此。と。を。昨日。の。地。を
 敷。足。あり。磐。城。下。り。あり。と。望。と。失。ひ。の。先。と。媛。君。小。告。を。終。り。計
 ら。ん。と。今。朝。も。彼。忍。び。ま。り。中。が。心。急。ま。と。樹。の。根。小。踏。を。凡。と。踏。を。夜。小。地
 志。心。の外。小。道。間。へ。帰。り。て。ま。り。人。の。居。る。庵。福。小。跡。む。炊。事。と。ま。り。の。中。の

如此と云ふ。この殺さすて夫の向不妾の内室の住て彼処へ来りし。
 いと怖し武夫の彰は出て内室の切らさるるも。氣も絶り
 身不副を逃歸りて住るるの事。その叔母不知りかく。屯不らまじし。
 その類末と語りし。然不もその折より。三草姓の来きて。媛君の心
 ろるの何よりこま不如んと。散ぶた方ある。三草の程よく。
 然らば今も言らる如く太田の莊赴くと。二決りて。主役三個。
 終夜太田と付て歩り。安平某生再説陸奥。朝夷三郎義秀へ
 脱不猛ハ異見不圖。越中へ。と止め。一先。後合之飯らんと。
 民們と。より還。身負槍と護送して。白澤紙より引飯。本街
 みげと。道程遙不隔りけ。逃ひ蒐来め。老も。平。と武
 義と。程谷の釋舎不著。彼不推の幕も。廻ら。兵の多

少い。知。且。軍勢屯る。朝夷。等。この。這。の。出
 来。り。且。く。不。居。る。容。子。と。不。ん。と。一。旅。店。不。憩。ひ。宿。の。主
 不。同。り。不。何。で。あ。う。定。る。存。せ。と。昨。日。の。薄。暮。遠。不。初。の。く。る。
 所。の。人。民。孩。子。心。ひ。或。ひ。の。老。親。と。曳。き。擗。き。老。の。手。と。推。ろ。資。資。雜
 具。の。運。び。の。敢。を。今。不。軍。の。始。ま。る。と。述。迷。ひ。騷。擾。る。す。か。の。陳。の
 統領。る。葛。西。兵。衛。清。重。の。使。と。て。五。六。個。の。強。擾。と。制。り。
 陸。奥。將。軍。家。の。使。と。と。遣。り。武。夫。の。彼。地。不。於。ん。叛。逆。を。眼。代
 地。頭。と。殺。害。る。後。合。へ。攻。登。る。注。進。佐。と。ね。と。用。心。不。若。く。と。あ。ら。
 主。人。の。葛。西。清。重。中。條。左。衛。門。新。田。平。次。の。所。の。武。士。不。令。せ。れ。と。
 張。不。不。虞。と。防。ぐ。必。殺。の。あ。る。も。あ。ね。の。不。噪。ぐ。と。あ。れ。と。示。し。
 漸。く。安。堵。の。思。ひ。と。り。平。生。の。か。く。不。吾。們。も。活。計。と。い。ふ。と。

尾小尾と著て注進。我と叛逆謀叛の徒とのひまるところ安らね然らば
 是より葛西の陳へ往向ひて緯の釈と逐一ふのひ披をこ通ふ若くは准後
 とある。獸六郎と猛公。俱ふ往んと乞けまご我一個を緯足する人多
 却て宜むじと制て頓てちあつ。葛西の陳小到ぞう。清重自出遊ひ
 寒暖の程と速かくと清重のさう。足下先以陸奥の檢前使とて紙られ
 一ぐのさる趣意う磐城時直阿武隈大夫その併の諸士と斬害するのこ
 ろ。農民救ふり集會旗と推と傍若無人の挙動へこ逆心小
 疑ひあつと膽沢荊原その他の知縣が早歩の弛書の赴を各一因て
 地へ我と。さう向らまて拒がむ。然るふさる人数も率志。帰糸の糸の林妙
 るまごのうあまの初猪擾ふ及むとさう。仔細をあらん開の後念より後宜
 るく言上あつと。在下等の爰不在りて。足下と止め時宜ふより。防禦の

做さんよ。まご。餘のまごの共ら。據て今より後念足下がぬ糸のほと
 松へ此知と通路のほ下知小任さん。旅店小在てそのほ沙汰と疾ふとま
 けま。朝夷謹と領掌。時直以下と斬害せり。深き仔細のあるとあれど。
 証扱あつと。叛逆ると。逸せま。ん。打惜く。その徒と生捕ま。り。是等の
 いと逐一注進あつと。憑ら。旅店小飯り。如此。あ。いと猛八獸六小の語り
 使とことと疾ふ。翌日小到。葛西の陳より。使節とて武士来り。義秀小對
 面。昨日足下がのさう。赴き。領小言上。及よの所。廣元善信以下の老臣。向
 注所小會合あり。衆評穿裁せら。れ。処。尚義秀異心あ。つ。より。や。何。等。の。つ
 ありとも。先謙念へ。松へ。公裁と作く。へ。ま。時直遠臣ら。り。ら。の。ま。ご。ま。ご。軍
 家の股肱あると。討果を各そのま。ご。加之。その坐不在。あ。の。諸士と。害。判。へ
 被処と退く時ふ。あ。つ。農民と集會隊伍と做。く。その容軍陳の趣。あ

まへ心叛逆ありし事。その形不彰へまで。罪の免と雖も人固くその所と法
 多入る。赦さざる。但し証状の為拘むらひる。者と生捕曳せしむ。そは
 正。其の御意も。叛逆の有無とも知らまん。固くその擒む。昔西の陳不受
 把て後命を送る。夫より執推の彼不於て擒む。鞫問し。や。盤城時
 等が。害口せしむ。罪と犯し。且義秀一点を。非分あり。と。その分の
 の。當下。後命を召す。此。宜く執達を。今。下。細めて。い。る。ま。未。件
 の。勇擒等。在下。通。より。人。その。準備。不。を。難人。等。とも。召。俱。して。い。ぞ。と。主人
 昔西清重が。口。証。より。演。ふ。り。朝夷。受。て。思。ふ。事。この。生捕。等。の時。亦。不
 従。来。阿。黨。せ。し。め。る。ま。右。の。如。く。お。ひ。後。之。執。推。の。彼。あり。て。この。後。の。こと。ひ
 含。む。ら。然。不。あ。す。の。命。と。取。り。証。状。と。あ。る。ま。口。口。口。口。我。と。強。て。重。罪。不。墜
 さん。する。計。あり。し。好。智。不。閑。執。推。が。巧。る。畏。不。罹。らん。也。と。心。裡。不。冷

笑ひ。あ。ま。不。合。て。い。る。事。証。の。御。き。執。達。あり。て。具。不。兼。諾。仕。つ。然。あ。り
 かの。擒。等。の。時。直。不。共。せ。族。其。坐。不。あ。つ。て。在。下。と。害。せ。んと。せ。者。あ。て
 ある。ま。の。渠。等。の。こと。口。口。せ。し。れ。鞫。問。あ。る。ま。已。と。是。と。在。下。非。と
 ろ。不。得。然。る。ま。の。執。推。の。評。定。悉。皆。画。餅。あ。る。ん。願。く。在。下。と。渠
 等。と。俱。不。口。口。せ。し。ま。對。変。る。ま。の。當。下。の。理。非。逸。と。分。明。あ。る。ま。然。あ。れ
 不。於。て。在。下。汚。名。の。時。ま。ゆ。り。雪。ど。が。く。鞫。問。不。あ。ま。と。勞。煩。多。り。
 故。と。り。擒。の。進。ら。さん。の。不。便。あり。この。義。宜。く。言。上。あり。て。再。バ。つ
 也。左右。と。茨。ち。奉。る。こと。あ。ん。ま。り。し。け。る。使。者。と。ま。と。兼。り。然。あ。る。ま。の
 一。清。重。に。傳。ふ。べ。し。と。て。ち。歸。り。し。が。その。刃。の。日。不。至。り。ま。二。人。の。使。者。未
 也。昨日。返。答。の。赴。き。と。即。刻。言。上。せ。処。その。義。理。あ。る。不。似。ま。と。脱。不。逆
 意。の。心。不。措。あ。る。ま。の。許。と。謙。會。へ。入。る。ま。の。事。難。固。く。擒。の。こと。召。し



葛西の使者
陸奥の掬を
遍与と
談を



まろハ

いけぢ

獸六郎

理非明白りひめいびやく小こ糾きうとんと作ある処ところと拒こむ。その理りつゝ、えいはる思おもふ小
 其許そのもとと鬼神おにあまのおそ怖おそ惶おそ故ゆゑ小こと對たい受うるべ。渠かれ等らが理りと威お威お嚴げんと
 非ひとひ枉かる較かく計けいあらん。の議ぎ決けつて救きうさるべし。さらにいふく擄りのと渡わり
 とあらすその逆さか支し脱だつ小こ十じゆ指しゆのゆびさんは知ち小こ差さいはを因に理非りひの乳
 断え小こ及および軍勢ぐんせいとさむけて。其許そのもとと誅をし。いふく一点てんの逆心ぎやくしん多おほくは復た小こ任にん
 と擄りと違とし。後のちの山沙さん汰たいと疾とす。の返へん答たと受届うけとどけ。時とき刻くわくと彼とこ
 復た命めいせよと嚴るあるあ命めいあり。さらにいふく擄りと速小こ違違とさらら夫それと違とさらら
 のは返へん答た兼かりくと詰りけり。義ぎ秀しゆと受諸しよ老らう臣しんが評議へいぎの結構けつこう奇き
 多おほく威嚴いげんと以て非と理不ふ枉かげ人と誣るし市いち井いる俗どりとと恥ちとせり在下した
 苟なり和田わだ義ぎ盛せい三さん男なんありて救るねど柳宮りゆうきゆうの近臣きんしん小こ擇たくまさる一個ひとつの社夫しやふ

任意た命めいと敵とくる罪科ざいこと犯をとも。必かなと違とんと罪多おほく人と隨々ずいざ
 かたてらる黒心くろしんの義秀しゆと受諸しよ老らう臣しんが見差みさふのとかる山沙さん汰たいの又をい
 義ぎ盛せいと始め一族いちじく等らが瑕瑾けうきんをいる因に在下した推おさるまじ披ひと存ずれ
 ども強て致さる命めい小こ背そむくの必かなと違とんと還て不忠ふちゆうの名とさららん終まり故ゆゑ
 故ゆゑ愚ぐ存ぞん存ぞん。應おせざすとも命の重と惶と擄ともと清重せいじゆうぬ小違違
 とふとさらら。然しかれどの擄等ら。万まん命めい終しゆうる不至しまらずも明あらむ道みちと失ふと
 故ゆゑ不ふ中ちゆうの功と苦と恙とあらんと要に和殿わだん等らと意を朝堂てうどうの
 手て充みと做一い人ひと若わか今いま日ひを死と擄等ら。明あ日あした不ふ慮りのとあらむ倭者やまとの所
 為なりと思おもひん。義ぎと克と執達しやくたつあらむと答へらるとの葛西かさいが使者しや。その
 意いめいあり。頓とん清せい重じゆう不ふ修しゆへりと受把うけと来き。その准ぬとあらむ急に陳所ちんじよへ歸りゆ。その後影えいと送りて猛まうハ逆と出大たい人ひとの倭者やまとの惡巧あくかうと
 急いそに陳所ちんじよへ歸りゆ。その後影えいと送りて猛まうハ逆と出大たい人ひとの倭者やまとの惡巧あくかうと

粗あらきりのひり容よう子し然しかるる不ふ邪じやとも推おしてり。做しさんとする不ふ敵てきがらくて。彼かの生せい捕とらまして
送おくりし。とも詮せんぬるはら不ふ似にともとも。遍ありし。此この方かたのり理りとも却かえりし。非ひ分ぶん不ふいはぬ
とも罪つみるるはら身み不ふ濡ぬ衣いとも著あるる。必かな定ぢやうありし。船ふね令しやう生せい捕とらましてり。遍ありし。とも改かへぬ
逆さか意いありしとも軍ぐん勢せいとも向むかひし。我われのも及およぶるはら。骨ほねをもたへてり。協あいぬ
とも一いっ命めいとも。不ふ小せう抱たかましるる。何なに条じょうともともあらん。理とも非ひ分ぶん不ふ隋ずいとも
とも安あん雨うともとも不ふ小せう後ご不ふ至しとも一いっ命めいとも失しふる。のり雅みやありし。今いま軍ぐん兵へい引ひ
らひてり。切き死しともとも就しゆ勝かちまる。とも遍ありし。とも約やくありし。とも改かへぬとも易やす
らく。克よく思し維いともとも義ぎ秀しゆのり成なりり。勇氣ゆう面めん不ふ彰ちやうともとも憑たのりし。とも希まれにし
朝あ夷しやうのり拱こうとも黙もくとも義ぎとも感かんずる。とも畢ひつ竟じやうとも段だん緯い長ちやうともとも編へんとも洗せん
とも竭きやくとも九く編へん不ふ精せいとも。者もの官くわん宜いとも發はつ兌たいのり日にちとも俟まち候こうともとも希まれにし
朝あ夷しやう巡しゆん島しやう記き全ぜん傳でん第だい八はち編へん卷くわん之し五ご終しゆう

朝夷巡嶋記

從初編 曲亭馬琴編述 全卅冊
至六編 一柳齋豊廣画

同 第七編

松亭金水編次 全五冊
葛飾為齋画

同 第八編

全全 全五冊

同 第九編

全全 全五冊

義秀方陸奥の擒を牽て鎌倉小入らんとし程谷少て柳馬琴の
數回の問答是非をくもかの擒を遍と及び執權の奸計を
描とんと巧めを剛若の猛八智術を以てその證と立はし
量の新奇妙算和田合戦の非を含むその顛末もこの編小詳
看ふ飽む稍小佳境小入るのあり

編述 東都 松亭金水稿本

出像 全 葛飾為齋畫

淨書 全 梅亭金鷲

剖刷 京都 樋口與兵衛

鉢被^{もろこし}復讐^{ふくまう}言初瀨物語^{せのめがたり}
全傳 粟枝亭鬼卯著 葛飾北明画 全六冊

信長筑摩川の事小厨五平との農人が女性前にあつたは成厨師太助が安河内由交世の人士の上が女初瀨津被せの事結母水まが交世の事初瀨津由大にた後が後記を子たを父の仇を尋て圖ら初瀨再会の奇偶より父の仇を妖怪で滅た初瀨觀者の美談を字記を

安政五年戊午春正月吉日發行

刊行 大坂心齋橋筋唐物町 河内屋太助 合梓

書肆 同 北久寶寺町 河内屋源七郎

軍書小説類藏板目錄 大坂心齋橋通 北久寶寺町 河内屋源七郎

楠二代軍物語 平かひ 繪入 五冊 繪本雪鏡談 春曉齋作 同前 十冊

楠正行戰功圖繪 茶後 十冊 同金花談 春曉齋作 并画 十冊

小楠公正行父正成卿の遺訓を守り南帝の御為の忠を奉りたり 屢奇兵を以て大敵を破る美談之 同孝感傳 同前 十冊

神功 三韓退治圖繪 皇古 五冊 同龜山話 同前 十冊

國史實録にも上古の事ハ詳ふにあり難たを今昔對のふまのてをて長一統傳のまに今代の容態に寫出 めれば見女子の目とて恨むるに 時々着官宜く事實を歸せ作者の筆墨に盡工為齋の意匠を賞しむべし 同顯勇錄 同前 十冊

九州諸將軍記 十二冊 同忠孝二見浦 南里直著作 柳齋重春画 十冊

同月宵鄙物語 真鏡作 十冊

復讐言岩見英雄録 初編 七冊

同 二編 七冊

同 三編 七冊

復讐言岩見英雄録 第四輯 七冊

南海 玉藻主人 詞述
浪花 一鷲齋歌川芳梅書 近日發販

本編は桂木充好の七人の著者修竹を推して
死後見極る野村新十郎と云ふ事あり
幾年及ぶ迄に丹波の山に於て修竹の條
を第五輯の別冊州の本後編に附し
毒害の信婦を除き又思の大敵を以て快話と

祐天上人一代記圖會 六冊

葉上死靈解脱物語 二冊

繪本誠忠傳 十冊

同 合邦辻 十冊

同 苔茅草紙 十冊

同 淺草靈驗記 十冊

同 忠孝美善錄 十冊

同 彦山靈驗記 十冊

同 二鷲英勇記 十冊

同 金毘羅神靈記 十冊

新累解脱物語 五冊

昔語質屋庫 五冊

同 中編 五冊

同 後編 五冊

朝比奈巡嶋記 卅冊

同 七編 五冊

同 八編 五冊

曲亭翁の回著にして鎌倉の時夏を知り史外の奇
書に目入れば妙案あるが松亭主人の編に據り
七編を目入れば賴家卿安達を盛々を奪ひ
こと朝比奈義孝檢問使を義孝の異子と忠
信後み義付が計り藩の勇を奪て克捷とあり

小栗外傳 十冊

繪本忠臣藏 十冊

同 後編 十冊

同 拾遺 十冊

同 畫本西遊全傳 十冊

同 二編 十冊

同 三編 十冊

同 四編 十冊

本編は演義三國志水滸傳金瓶梅を以て
の四大奇書と漢土を採りて絶域の作を
話るれ書味面白くして中篇を畫す

松原 秋七種 曲亭主人述作

河原久松の近世世説を古今南朝の末の清世の
かん時ゆゑの忠臣勇士の節義をより
除松古主の想に義を記せるなど實なる

石言遺郷音 同前 蹄齋北馬画

遠江の國小夜の中山さる夜泣石鏡種と
雪川の里の奇譚るんと哀れにわらまきゆ説

月氷奇縁 同前

金花夕映 梅暮里谷岫作 北嵩画

孝子嫩物語 蘭山作

繪本夜舩譚 栗本春見齋画

繪本那智白糸 蘭山著 北馬画 六冊

同魁草紙 平町春三馬画 五冊

同奈古曾の刺 成和亭龜武作 蹄齋北馬画 五冊

同平泉實記 連水春曉齋 述作 藤園畫 十二冊

同自來也説話 成和亭龜武作 十二冊

同口之碑 千鶴庵萬電作 尋跡齋雪馬画 五冊

風流俄天狗 前編 十冊 後編 十冊
村上杜陵子の撰るる二つて南王本虎虎并
藤年 淀川 目鏡 三雷 田治 又流など八
仕組るれ俄の初向山か二若ものり

紙治小春楮生談 東魚作 春嶺画 五冊

小尊 八上鳴影 谷田菊亮作 十冊

復讐言初瀬物語 北明画 七冊

厨五平が女怪氣に死れしう妖賊厨摩即太郎の
出身河内國交野の柳上山に女初瀬被さるる
徒母水走が妖悪の撰津國大江左膳が獲れ其子左
近父の仇を遂げて圓らば初瀬を再會の奇偶より父
の讐を妖賊に滅せしは初瀬の觀望の靈験を證し

開際筆記 懶齋藤井先生著 三冊

新田足利平外名將の評論聖武帝の傳を
著しんと長室皇子よかを賜ひ論及は國
各汲の油に石脚油するは漢人殺國の事を記す
小奇譚 みるは小島玄慧が聖徳太子を聖人として
過譽の私論を刺し諷刺より帝納の字を以て
て根柢を定む俗説を破りし論 庚申の説を以て吉
公人臣の事を忌れおひゆるし餘亦漢古今の
雜史をあげ傳層を柳(秋怪)と叙する切要の書

繪本白壁草紙 東里山人作 岳亭画 六冊

見外白字巻利 十五卷 五冊

通俗巫山夢 春の屋主作 伴之曲 三冊

貧福太平記 春の屋主作 伴之曲 三冊

同安達ヶ原 石田夏彦画 六冊

再開高臺梅 栗本春見齋作 六冊

復讐言東物語 金六樓作 揚齋正吉画 六冊

教訓部都言種

前編 全四冊

百家琦行傳 五冊

五冊

老羅子の著作... 黒田如水の定書... 紀正盛の物語... 徳川老佐如水の巻物... 別子と黒田如水の巻物... 黒田如水の巻物...

農工商と俗論... 四十有九人の事實... 信何村... 確実...

雨月物語

上田秋成著 五冊

揚州... 續猿蓑... 二冊

桂林漫録

桂川中良先生著 二冊

美作孝民傳 十冊

好古博識和漢の雜史... 大坂の看人... 面白き書あり

三條小鍛冶名釘由来

合戦評判

昭代著聞集

古戦評判

太平記

片假名 大字

廿二冊

續古戦得失論

續太平記

三都

江戸大傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛

同 京橋彌左衛門町

大島屋傳右衛門

同 下谷御成道

紙屋徳八

發行

同 馬喰町二丁目

菊屋幸三郎

同 中橋東中通下旗町

大和屋喜兵衛

書林

京都三条通御幸町

吉野屋仁兵衛

大坂心齋橋北久寶寺町

河内屋源七郎版

三ノノ

